

ニューヒストリー (New History) の百年

紀 平 英 作

第一章 はじめに

小論は、二〇一六年十一月二日、京都大学で行われた『史林』百周年回顧と展望」と題する史学研究会大会での筆者の口頭報告を文章化したものである。当日は、史学研究会にとり節目となる記念講演会であったことから、聴衆の方々には、『史林』に寄せるおのおの思い出が強く滲んでいるようにみえた。筆者もその思いに誘われ、はじめに多少の私事をそえた。文章化に際し、その部分も当日の雰囲気を残すものとして、とくにいじらなかつた。その点、関係の諸氏にはあらかじめご了解いただければと思う。なお、小論の後半で触れる、戦後日本の歴史学がたどった幾分かの（あるいはある部分の）「ガラパゴスの展開」という論点については、異論や、釈然とせぬ思いをもたれるむきがあるやもしれない。実際小論は、限られた時間の制約から、この部分は全く

の生煮えの議論で終わっており、忸怩たる気持が筆者にも残る。そのこともあり、他日を期して戦後日本の歴史学が辿った足跡を改めて検討したいと考えている。この部分についてはその論稿をまつて関係諸氏の叱声に応えたいと願っている。

以下、本論である。

まず『史林』（史学研究会）の百年の歩みに敬意を表したい。その百年、様々な困難に直面しながらも、膨大な史料を発掘し、また校訂し、さらに難解な文字を解読してきた人々。そして昼夜を問わず思索し、夕闇の中でも原稿用紙に一字一句を書き込み、推敲に汗を流した人々。およそ千人を超えるだろうそうした人々の懸命な努力があつて、『史林』は創刊以来今日まで、学術雑誌としての高い水準を維持してきた。

私事で恐縮だが、一九八〇年代初め、故鎌田元一氏から教わつ

た漆紙文書、またその後、日本史ばかりか東洋史の方々からも教わった古代史料に不可欠な木簡や竹簡の存在。さらには様々な碑文、拓本。あるいはヨーロッパ史に目を転ずれば、キリスト教修道会が中世を通して書き綴った年代記、あるいは近世の古文書、土地登記記録などを必死で読んだ人々を思い出す（ちなみに鎌田氏は筆者と大学入学が同期であり、一九八三年同じ年に京都大学史学科に助教として転任した、思い出深い人である）。彼らの真摯な努力にひたすら敬意を表したい。

しかし、史学研究会また『史林』にとつてたしかに記念すべき本年ではあるが、その百年をただことさらに懐かしみ、あるいは自賛するだけで終わっていい訳もなからう。その間、この研究会そして『史林』は、やはりそれなりに多くの苦難に直面し、また問題をかかえてきたことも事実である。主催者が本セミナーに「回顧と展望」という表題を掲げられたのも、その故に違いない。小論もその趣旨に沿って進めたい。

そもそもこの百年とはいかなる時代であり、わが史学研究会はその時代とどのように向き合ってきたのか。今日の記念の日からすればやや迂遠だが、少し視野を広げ、われわれが身をおいた百年とその間の歴史学の歩みを掘り起こしてみたい。ちなみに、『史林』創刊の一九一六年は、日本にとって第一次世界大戦下、

つまり戦時下であった。青島を占領し、中国に対して対華二カ条要求をつきつけた翌年である。そしてヨーロッパ戦線では、一日に数千人もが死亡したとされるあの凄惨なヴェルダンそしてソムの戦いがあった年なのである。まさに時代は激動の中にあつたといつてよい。

第二章 改めて問われていた「歴史とは何か」

『史林』が創刊された、そうした激しく揺れ動く二〇世紀初めの二〇年ほどは、日本ばかりか人類の歴史にとつても、根本的な転換期であつたようにみえる。そして歴史研究も、その社会変化を投影してニューヒストリー (new history, la nouvelle histoire) なるものが主張されはじめた時代であつた。

たとえばフランスでは、雑誌『アナール』をいずれ創刊する、リュシアン・フェーブル (Lucien Paul Victor Febvre) およびマルク・ブロック (Marc Léopold Benjamin Bloch) が学問的活動を開始した時期である (アナールの創刊は一九二九年であつた)。さらにイタリア人ベネデット・クロッチェ (Benedetto Croce) が『歴史叙述の理論と歴史』*Zur Theorie und Geschichte der Historiographie* を、一九一五年に発表している。そこでは「あらゆる歴史は現代史だ」とする歴史の新しい見方が、語られ

はじめていた。さらに、同様の主張をやがてとる若きコリングウッド (Robin Collingwood) が、イギリス、オックスフォード大学で教鞭を執りはじめたのも、一九一二年なのである。

そして本日とくに取り上げるアメリカ・コロンビア大学教授ジェームズ・ロビンソンが、文字どおり *The New History* と題する論文集を発表したのが、一九一二年であった。^①つまりニューヒストリーへの動きは、二〇世紀初めの時期、目に見える組織的運動としてあったわけではないが、今日からみれば明らかに連関した太い世界的思潮であった (少なくとも欧米文化圏では)。

そうした意味で、彼らが唱えたニューヒストリーとはどのような内容であったかを、一般的なかたちで簡単に整理しておきたい。

二〇世紀初めの時期に登場したニューヒストリーの歴史家たちは、興味を持つ時代や地域はさまざまであったが、かなり突き詰めた根源的問いを共通していた。自らを専門的歴史家と位置づけたいうえで、歴史を描くということはどういうことか、「歴史とは何か」という、歴史家と自らの存在に対して投げかけた設問である。

彼らはその問いをとおして、先行した一九世紀の歴史家、たとえばイギリスのヘンリー・T・バックル (Henry Thomas

Buckle)、あるいはプロイセンから帝政ドイツにおいて一大スクールを形成した周知のランケ学派 (Leopold von Ranke) にむけて、強烈な不満を表明していた。第一世代の科学的歴史家と呼ばれたランケへの不満とは、およそ次のような内容であったといつてよい。

確かに、第一世代の歴史家たちは歴史をそれまでのフィクションのようなものから、厳密な史料批判に基づくものへと変えた。さらに彼らは歴史に神学的、あるいは神話的命題が入りこむことを峻拒し、歴史をあくまで世俗的に、現実が起こったものとして捉えようとした。歴史叙述から奇跡や神話が消えたことは、第一世代の歴史家の最大の功績であったといつてよい。

しかし、先行する歴史家たちは、そのような転換を進めながらも、そもそも何を歴史と考え、何を描こうとしたのか。たとえばバックルは、資料を豊富に集めることによって、人間が文明的になること、つまり人間の発展の法則が実証できるとした。しかし、バックルが著作で発展として描いたのは、結局のところヨーロッパ文明のなかにある、ある一つの道筋だけではなかったか。その道筋から逸脱する様々な事実があったにも拘わらず、著者はそれらの逸脱には目をつぶり、あえていえば人間のあるべき発展の道Ⅱ法則からみれば、除いてよいものとして捉えた。そのような視

野で彼が描いた歴史は、一面的であり、事実の選択も結局のところ恣意的かつ無批判ではなかったか。

ニューヒストリーの歴史家たちは次のように小括する。広く現在にまで至った人間の歩み、いわゆる歴史的事象とは、われわれの知る能力をはるかに超えて無数に、あえていえば無限なまでに存在する。さらにいえばそうした事実の関連さえも、ほとんど混沌としているといつてよい。そうしたなかに歴史の発展の法則を見いだそうとすれば、その企ては初めから虚妄とならざるをえないだろう、と。

ニューヒストリーの論者がバックルを越えて、さらにランケ・スクールに投げかけた批判は、いつそう辛辣で根底的であった。なるほどランケたちは、確定できる史料に依拠するとし、その史料批判は厳密であったが、そもそも彼らが描こうとしたのは、プロイセンあるいはドイツのナショナルな台頭を自負し、それらをロマン主義的に鼓舞するものではなかったか。加えて彼らの歴史は、ドイツの統一を実現したエリートの足跡を正当化し、彼らの権力と統治を支援しようとする保守的な歴史ではなかったか。ランケ史学もまた、権力に対する批判力を持たなかったという点で、あえていえば無批判な権力の歴史に終始した、と。

二〇世紀に入ってニューヒストリーを説こうとした歴史家たち

は、歴史における王国や国家の役割を決して否定する人びとではなかった。国家は社会のあり方が顕れるものとして、重要な歴史叙述の対象たることを疑わなかった。しかし、その一方で、国家を統べる権力者やエリートに寄り添った歴史叙述は一面的であり、歪んだものとなると批判した。歴史叙述とは社会をよりトータルに、そこにおける多様な構成要素に関心を払ってみるべきものであり、さらにいえばそこに描かれる歴史とは、変化する時代を意識し、その変化のあり様と意味を多様に読み取ろうとする努力でもあるべきだ、と。重ねて言えば歴史とは、現状を肯定するものではなく、あえていえばいかなる時代に対しても、社会のあり方をより多様なものとしてみていく努力であろう、と。

まとめてみよう。二〇世紀前半に登場したニューヒストリーの歴史家たちとは、系譜的にはランケたちに続く、近代の第二世代の科学的歴史家であったと今では整理してよい。ただし、その科学性に加えて重要であったのは、彼らが、第一世代の歴史家にはない「生きた」歴史を求めたこと、あえていえば自らを、自立した「生きる」歴史家であると位置づけた点であった。専門的職業人であることを強く意識する彼らが目指した「生きた」歴史とは、広く整理すれば次の三点の方向性を持った。

第一。彼らはまず、根本において歴史家に問われるのは、職業人また科学者として、歴史家が何を描こうとするかを問い詰めることだと主張した。史料をどのように膨大に集めたとしても、じつは史料の膨大さは人間の足跡のすべてに比べれば限られたものでしかない。さらにどのように科学的であったとしても、歴史家が史料から知りうるものには限界があり、結局彼らが描く歴史とは、歴史家がある関心のもので選んだ事実と史料をいかに眺め、考えていくかならざるをえない。もしそうだとすると、歴史を描く歴史家の関心のあり方こそが、問題なのだ、と。

第二。自らが「生きる」人間であるとすれば、そして時代の変化を感じとる存在であるとすれば、歴史家が描く歴史とは、現状の世界をあるべきものとして正当化するだけの保守的な歴史、えせ「科学」であってはならない。むしろ現状に対して、あるいは現代を、距離をとって眺めることが可能となるような、批判的精神をもった学問でなければならない。どの時代のあり様も、常に所与のものではありえない。歴史家は、それを人間の歴史として相対化し、それぞれの時代の複雑な成り立ちに目を向けることが、肝要なのだ、と。

第三。結びとして、たとえば一九二二年、コロンビア大学教授ロビンソンはかく説明した。

歴史家が描く歴史とは「あるがまま」のナラティブなものではなく、ある時代の社会のあり様がどのようにしてそうなったのか、またそれがどのような変化の契機を孕んでいたかを再構成していく仕事であろう。つまり歴史とは、社会のあり様、その構成に関心を向け、長い視野からさまざまな人びとの営みを見つめ直すこと、そうした作業を通して社会が「いかにしてそのようになったのか」を問う学問である。「いかにして」という視野から描く歴史とは、どの時代あるいは社会もが、実は多面的であることを明らかにするであろう。その多面性に目を向ける視点は、現在をも批判的にみる眼差しをわれわれに与えてくれるに違いない。重ねてロビンソンはこうも言う。歴史家は社会に、また広く人類に対して職業人として責任を負っている、と。

歴史を、さらには現在を批判的にみようとするとニューヒストリーの歴史家たちの視点は、なるほどナショナリズムが吹き荒れ、さらには国家が最大の磁場であった二〇世紀初頭の知的環境のもとでは、およそ衝撃的なまでに新鮮で、また状況によっては時代に抗する議論でもあった。事実、その激しさを秘めた新鮮さは、彼らがどのような歴史を具体的に描こうとしていたかをみること、一層鮮明となろう。二〇世紀の歴史研究に大きな影響を与えた彼らの歴史に対する姿勢、とくにその分析手法を次に垣間見て

みたい。

第三章 ロビンソンが具体的に提言した

ニューヒストリー

二〇世紀の初め、歴史を描く手法として具体的にはさまざまな議論が登場した。それらをもれなく整理していくことは当面の筆者の能力を超えるので、ここでは一二年のロビンソンの著作『「ユーヒストリー」を手掛りに、彼が時代のなかでどのような歴史叙述を提言していたかに焦点を当ててみたい。

ロビンソンが生きた二〇世紀初頭は、人類の歴史ばかりか、アメリカにとっても決定的なまでの大変動期であった。工業化が急速に進み、また都市化、さらには西欧の膨張、ナショナリズムと帝国主義という、グローバル化が地球上のいたるところに激しい変化をもたらしていた。そうしたなかでロビンソンは、歴史が継続したものであるとともに、そこに変化の要因を含んでいるという、いわば歴史を長い視野でみる必要性を強調して止まなかった。

とくに、その長い持続的視野でみる場合、個別の対象が政治であれ、社会のあり方であれ、彼は次のような要因を考えることが根本的に重要だと強調した。(1) 社会の展開をみる場合に、経済的要因が果たす役割に充分な関心を払わねばならない。(2)

政治のあり方を論じるときにも、それらを事件史、エピソードとして論じるのではなく、ある社会の政治現象として、たとえばそこで権力のあり方、性格、さらには社会内部においての権力の分配のあり方に関心を持ち、それらを構造的に眺める視点が重要なのだ、と。

くわえて今一点、歴史家は、一般民衆 (common people) とよんでよい、社会の中間にある人びとあるいは下層の人々にも深い関心を寄せるべきであり、そうした人びとを中心とした社会の日常のあり方を視野に入れねばならない、とも。ヨーロッパ近世史を専門としながらも現代に強い関心を持ち、リベラルで革新的であったロビンソンは、社会科学さらには自然科学の進展に強い関心をよせて、歴史研究はそうした総合的科学的支援を受けるべきだとした。その上で、現代社会が大衆の登場の時代である以上、これからの歴史は、庶民を視野に入れた研究でなければならない。その視野の拡大こそが、歴史を総合的とする、と。

経済活動に関心を払い、またそれまで政治権力から除外されてきた庶民、とくに彼らの生活の日常にも関心を払う歴史——ロビンソンが提唱した新しい歴史の骨格には、その後の二〇世紀の歴史研究において重要な研究手法となる社会史への展望があった。たとえば人びとが生きるうえで、基本的な縁^{よすが}としただろう日常の

慣習、文化、宗教的思い、家族のあり様、世代構成、さらには社会環境の変化への関心が、叙述の対象としてこれまで以上に重要であろう。そうであればわれわれが目指す歴史は、単に視野をより広くとるばかりか、歴史を長期に亘って観察する、時間幅の長いものでもあらざるを得ない。そのような長いタイム・スパンでみて社会の構成が、さらには社会における人びとの生きようが、そしてそこでの政治権力がどのように組織され、さらに変化していくかが、われわれが描こうとする新しい歴史の骨格となるであろう、と。

以上のような議論をロビンソンは次のようなかたちで結んでいる。

人類の歴史は、ブレ・ヒストリーも含めればおそらく二〇万年もの長さをもつことを、近年の人類学また生物科学は教えている。だとすれば、今われわれが重視する世界でのいわゆる「人種」の違いなどは、人類の歴史にとってはほとんど意味がない。それ以前に人びとの多くは混血し、いわゆる「純粋」なるものは、近年作られた神話に過ぎないものだからである。われわれはまず何より、世界を普遍的にみるべきだ、と。

歴史家は、その普遍性を基礎において現実を相対化し、さらには批判的にみていくべきなのであり、そのような視点からの歴史

叙述は、歴史家が常に主体的であることをなにより求める。歴史研究とはあえていえば、現代に生きる一人の知識人、歴史家の主体性の上に成り立つ学問であると考えたい、と。彼の議論は、おそらくやや遅れて、すべての歴史は現代史だとかたったイタリア人クローチェの主張とも、深い部分で通底する議論であったと言ってよいであろう。

第四章 日本の歴史学、そして『史林』の百年と ニューヒストリー

二〇世紀初頭、ロビンソンらがニューヒストリーと称して展開した以上の提言は、およそ歴史学のみに留まる議論ではなかった。広くみれば彼らの主張は、激しい社会変化を経験していたアメリカ社会、あるいはヨーロッパ社会が孕んだ新しい時代への関心から発しており、現代をより客観的にみようとするとする知的努力の一環であった。彼らの主張が、今日のわれわれが顧みても多くの興味深い論点を持つ所以であるが、そうであれば同時期に急速な近代化を進めていた日本の歴史家たちは、ニューヒストリーの提言をいかに受け止めていたのか。そのことに最後に触れて、日本の歴史学として『史林』の二〇世紀を振りかえる、ひとつの手掛りとしてみたい。

もとよりその立論にあたつて、われわれはロビンソンらの歴史学をことさらに規範的な歴史論であつたと聖域化するつもりはない。そうした規範化は、歴史研究を結局は歪めてしまう偏りとして、いかなる場合にも峻拒したい姿勢であり、むしろわれわれはロビンソンらの議論を、日本の知識人がその間、無関心ではなかつた世界の動きとして、あるいは同時代に晒されたひとつの知的環境として考えてみたい。二〇世紀の日本の歴史学は、そのような環境としてのニューヒストリーの提言をどのように受け止めたのか。あるいは、それからは独立して、自らの道を模索していたのか。本日の報告の要となる問題ではあるが、それらを十分に展開する準備もないことから、以下ではさしあたり思い当たる二点を要約的に指摘していきたい。

一。一九一六年以降、ある時期まで日本の歴史学は、ロビンソンらが掲げた普遍的で多元的であろうとする二〇世紀ニューヒストリーからみれば、かなり異質な、極端に言えば閉鎖的な環境のなかで展開したことは間違いない。とくに戦前の場合、政治環境からみてもその事情はやむを得ない側面を持った。しかし、環境が大きく変わり、より自由な問題意識から出発したとされる戦後の歴史学、いわゆる戦後史学の場合にも、実は戦前を裏返したような特異な日本の枠組み(ある種のガラバゴスの枠組み)、もし

くは心性が一部に存続していなかったか。あえて問うのであれば、そのような状況と、そうした状況はなぜ起こったかという問題である。当面筆者は次のように考えたいと思っている。

戦後にも残つた日本的枠組みは、もとより大半は、ことの善し悪しの問題ではなかつた。どのナショナルな社会もそれぞれに関心の枠組みを持ち、たとえどのように普遍的と言つても、ナショナルな社会を分析するのに独自の姿勢をもつことは、自然の成行きであつたからである。ただ、そうした意味での善し悪しとは別に、たとえば戦後、異常なまでにマルクス主義的發展段階論が強く意識されたことから、立場を異にする歴史的議論を否定するような態度が一部にあつたことは、やはりきわめて日本的であつたのではないか。

少なくともその一部の研究は、きわめてドグマティックな「神話」的觀念を歴史学に再びもちこみ、すこぶる権威主義的な姿勢をとつたように見える。そこにはより多様であり、批判的であろうとする歴史研究のあり方を否定的に捉えようとする傾向さえ見られた。さらにその否定が、逆の立場の人びとにも、反動として頑なな権威主義を生みかねなかつた。そうした競争的権威主義が、戦後の日本の歴史学に一時期にせよなぜ残存したのか。改めて検討してみたい問題はそれである(ただし以上の議論の半ばはほと

んど具体性を伴わない、ただの印象論である。筆者が生煮えと冒頭で書いた理由である。その意味でこの部分については、機会をみて改めて再論すべきであろう。

二。ただそのように一部で権威主義的傾向が残った一方で、二〇世紀半ばから今日まで、われわれの歴史学、そして『史林』は、二〇世紀ニューヒストリーの提言を受け止め、それらを必死で吸収してきたようにみえる。あえていえばそのようなグローバルで普遍的な歴史研究への努力が、今日の『史林』を支えている。それこそが、本日は非とも強調したい事実なのである。

二〇世紀の半ばから、われわれの先輩たちの歴史研究の視野にはいくつもの新しい側面が現れた。たとえば(一)、政治社会を長期の視野で構造的に捉える社会構成体的視点を持ったことは、そのひとつだろう。その社会構成体的視点は、マルクス主義的歴史学の刺激を受けつつ、他方ではニューヒストリーの提言も受けて、歴史を長期の視野で、そして何より全体史として捉えようとする姿勢であったと思う。われわれが今日継承すべき、基本的な態度のひとつと考えたい。

さらに(二)、一九八〇年代から強調されはじめた社会史、あるいは、民衆の日常生活への関心、文化への関心、さらには二〇世紀末から登場し始めた世界史を普遍的にグローバルに見る視点

なども、ロビンソンが一九一二年に先駆的に提言した展望を戦後の欧米学界の動向にも刺激されて、われわれなりに内実化したものであった。それらにも、今後さらに引き継ぐべき多くの視点が含まれているであろう。

右をふまえて現状と近未来への若干の展望を記してみたい。

本日筆者が紹介したロビンソンの議論は、二〇世紀前半のものであり、そのすべてを今日のわれわれが鵜呑みにする必要は、もうとうない。むしろ相当の時間が経ったことからすれば、彼らの意識しなかった問題にも目を向け、あえていえばさらにニュー・ニューヒストリーを構想していくことが、すでにわれわれの課題でこそあろう。歴史の理解と手法はそれなりに変化するはずのものだからである。ただそうした構想はここで立ち入って論じるにはいかにも大きな問題であり、また私にその力もない。今はそのような課題に向けて私なりに思う二点を最後に付言しておきたい。

一。二〇世紀初めのロビンソンは、おそらくは多くの国で横行した、国家を称揚し、また自らの文明をより高いものと捉え、さらには民族的精神を鼓舞する意識を暗黙の前提としたような伝統的歴史叙述にかえて、ひろく人間の未来のために行う知的営為として歴史学を位置づけようとした。その議論にはいまも聞くべき

多くがあるが、他方で二〇世紀人としてのロビンソンにとつて、人類はあくまで進歩し、またより科学的になるものと見做されていた。人間さらに社会は進歩すると捉えた点で、彼はまさに二〇世紀人であったといつてよい。

しかし、二一世紀に入ったわれわれは、いま彼ほどに進歩の理念を素直に受け入れることができるのだろうか。なるほど、ロビンソンは、二〇世紀の歴史家として優れた展望を持ち、多くの問題を予見した。国民国家への展開、民主主義の時代、そして大衆の登場と呼ぶような状況を想像し、さらにその裏で一部にせよ、ファシズムの台頭さえも感じ取っていたようにみえる。

しかし、そうしたロビンソンも全く予想しなかった事態がその後には展開した。たとえばそれが、人類の消滅をもたらすかもしれない核兵器もしくは核エネルギーの登場であり、また世界人口の爆発的增加の問題であり、さらに、途方もないまでに進んだ、自然環境の破壊という現代工業化社会が行き着いた問題群である。

二。その他にも、われわれの周囲には多くの人類の問題が、グローバル化の一層の進展で堆積している。地球環境の変化の問題、さらには人類が競って貪りとするような地球資源の浪費をみると、われわれは二一世紀がどのような未来に繋がるかを予想できないばかりか、むしろその将来に厳しい眼差しを向けざるを得ない状況

だだとさえ思う。価値観の多様化と、分断もまた深刻であろう。

かりにそうした問題に対しても、いたずらにペシミスティックにならず、歴史研究があくまで現代を相対化し、さらには批判的にみる視点を与えるものとするロビンソンの指摘を受けとめるのであれば、われわれは現代に対して、どのような歴史研究を提供できるのか。自然と人間との数万年にものぼる関係は今日、従来にも増して大きな歴史的テーマであろう。いな現代に生きる人類として、掛替えのない問題であるかもしれない。

さらに、今日の深まる分断をより広い視野でみるためには、たとえば排他や利他の思想などという、歴史的である人間的価値観や社会意識の再検討が、必要となるのかもしれない。いずれにせよ、今日の歴史研究が抱える問題は、われわれ歴史家が現代に、そして未来にどのように向き合いながら過去を眺めていくのかにある。そこでは世界観が問われ、さらには人類観が問われている。

あえて結べば、科学者としてまた専門家として幾分かの意味をもつて生きる以上、われわれは時代に対してさらに鋭い、研ぎ澄まされた眼差しを持たねばなるまい。どの角度からみても楽観的あるいは希望的観測が許されない状況のなかで、人類の歴史をより長期に眺め、しかもその共生を求める視野を持つとするのであれば、そこには歴史家として相応の覚悟が必要であろう。

『史林』の百年にあたり、とくに、これからも長く歴史研究に携わろうとする若い研究者の方々に對しては、歴史学の今、そして人類の今と未來についてたえず真剣に考えながら、過去に向き合つてほしいと切に願っている。

① James Harvey Robinson (1863-1936) アメリカ合衆国イリノイ州生まれ、ハーヴァード大卒。ドイツに留学、フライブルク大学で学位(憲法史を専攻)。コロンビア大学教授(1895-1919)、ヨーロッパ思想史を担当。アメリカ歴史学協会 American Historical Association 会長(1928-29)。論文、著書に、“The New History,” *Proceedings of American Philosophical Society*, vol. 50 (April 1911), *The New History: Essays Illustrating the Modern Historical Outlook* (Macmillan, 1912), 他に *The Mind in the Making: the Relation of Intelligence to Social Reform* (Harper, 1921) などがある。

追記

当日、筆者は以上の報告の後に予定されたパネル・ディスカッションでの話題提供のため、若干のデータを用意した。報告本論とは関係しない議論だが、『史林』の最も大きな転換期であった敗戦から戦後直後にかかわるデータであり、ここに追記として紹介する。まず表1をみていただきたい。

この表をみると、一九四五年から四九年にかけての『史林』がきわめて困難な状況に直面していたことが痛ましいまでに了解で

史林 (1916年、1945—50年)

1916年	第1巻	4冊
1945年	第30巻	4冊
1946年	第31巻	1冊
1947年	31巻	2冊
1948年	第32巻	1冊
1949年	32巻	1冊
1950年	第33巻	6冊

表1 創刊ならびに戦後直後の『史林』の発行状況

きるのであろう。それは、史学研究会といわず、日本の歴史学にとってまさに最も困難な試練の時期であった。

単純に数字をなぞれば、『史林』は敗戦の四五年こそ創刊以来の四冊(第三〇巻)の発行がなされたが、四六年以降まさに氣息奄々の状態へと陥る。四六、四七年の二年をかけて第三一巻、三冊が発行され、その後も、第三二巻が二年がかりで発行された。冊数は、わずか二冊である。多くの研究者が食糧事情から研究もままならず、さらには紙の調達さえできない時期であったが、そればかりか、なにより厳しい試練が執筆者に降りかかっていた。知られるように、京都大学文学部史学科ではその間に数名の教授が「追放」処分を受けて教壇を去っている。

○第三〇巻 第三号 (一九四五年九月) 原 随園「ギリシアに於ける歴史学の展開」 梅原末治「本邦古墳出土の同范鏡に就いての一二の考察」 林屋辰三郎「平安京に於ける受領の生活」 那波利貞「晩唐時代の撰述と考察せらるる茶に関する通俗的滑稽文学作品」 ○第三〇巻 第四号 (一九四五年十一月) 梅原末治「銅鑄考」 愛宕松男「蒙古史の一側面としてのロシア史—モスクワ王国の成立過程への考察—」 藤谷俊雄「日本儒学独立の地盤」 ○第三一巻 第一号 (一九四六年一月) 宮崎市定「清談」 原 随園「ツクディデスの古代史に就いて」 村山修一「日本中世に於ける歴史記念物の発生とその意義」 ○第三一巻 第二号 (一九四七年五月) 曾我部静雄「徭役と課税と復除」 井上智勇「所謂「民族移動」の歴史的意義」 ○第三一巻 第三・四号 (一九四七年十二月) 浅野 清「法隆寺の金堂と塔」 織田武雄「農業地域に関するエンゲルブレヒトの業績」 外山軍治「太平乱に於ける清朝の外国に対する援助要請」 今津 晃「アメリカ史学に於ける「科学学派」について」	
--	--

表2 1945年9月から1947年12月の『史林』

『史林』が敗戦後、ようやく立ち直り、現在に繋がる発行体制を整え始めたのは一九五〇年であった。興味を引くのは、その年の『史林』が、創刊以来続いた年四冊ではなく、六冊の隔月発行を目指した点である。厳しい試練を耐えた人びとが再建に向けた熱い思いが伝わる、新機軸であろう。 もとより再建にむけての始動は、急に五〇年に始まったわけではない。その間の『史林』をめくると、四八年頃がひとつの転機であったようにみえる。 表2ならびに表3は、前者が四五年後半から四七年にかけて発行された五冊の『史林』の執筆者ならびに論文タイトルであり、後者はそのあとの四八年一〇月に発行された、第三二巻第一号の	原 随園「アリストテレスの理想国家論について」 梅原末治「北部仏印の青銅器時代について」 田村実造「東方史の構造とその展開」 貝塚茂樹「威儀—周代貴族生活の理念とその儒教化—」 織田武雄「ソロモン王のオフィルの航海について」 柴田 実「平安京の経済」 中山治一「三国干渉と英独関係」 藤 直幹、直木孝次郎、三吉 希、高尾一彦、柴田 実 「最近国史学界の動向」
---	--

表3 1948年10月発行の『史林』
第32巻1号

それである。

第三三卷第一号の特徴は、前号の第三二卷第三・四号からあえて一年の間をとり、戦後の混乱をやむを得ないものとして受け止めた上で、歴史学の再建に向けて一步を踏み出す強い決意を示そうとした点である。七篇という戦後最大数の論説を掲げたことがその意欲を示す一方、巻末におかれた五名の日本史研究者による「最近国史学界の動向」は、その新しい展望を牽引しようとした労作であつたようにみえる。その学界動向の中で、五人の執筆者は戦後二年半が過ぎた歴史学の動向にふれ、新しい学会誌の発行からさらに歴史研究のあり方にまで言及して、多くの論説の意義を紹介している。詳しくは、二五頁ほどの論文なので、各自お読みいただくほかないが、以下では、その学界動向の冒頭の一文のみを剔出したい。われわれの歴史学は、たしかにこの一文から始まった、そのような思いさえ抱く雄筆である。当該誌、一三〇頁上段の一文である（旧漢字を新漢字に置き換え、またひらがなに変えている）。

戦後数年の間、相つぐ変革の過程にあつて学問研究のあらゆる分野に生じた厳しい自己変革の現象は、国史学においては、それが戦時中極度の政治的支配の下に歪曲化せられたという特殊状況により重要な意味を持つものである。従つて最近に

おける国史研究の動向を概観するとき主として採りあげるべきは、この最も困難な時代を生き抜く学徒がいかにして自己の課題を遂行しつつあるかを考えることである。

文中にある「学問研究のあらゆる分野に生じた厳しい自己変革の現象」——それは、巨大な戦争の後にもたらされたものであつたが、他方で、われわれもまた人類規模ともみえる大きな社会変化のなかで、現代を改めて見直すという、その意味での自己変革もしくは自己確認という課題を背負っているように思える。いわば歴史研究はたえずそうした自己を見つめ直すことから始まることを、この学界動向は教えてくれているのであろう。（了）

参考文献

『史林』第一卷（一九一六）、第三〇卷（一九四五）（第三三卷（一九五〇））

James Harvey Robinson, *The New History: Essays Illustrating the Modern Historical Outlook* (Macmillan, 1912).

A・ビュルギエル編、浜名優美はか訳『叢書「アナル1929-2010」』

歴史の対象と方法、1 藤原書店、二〇一〇

上原専祿、上原弘江編『世界史認識の新課題』上原専祿著作集二五巻（評論社、二〇〇二）

福井憲彦『新しい歴史学』とは何か——アナル派から学ぶもの』（講談社、一九九五）

羽田正『新しい世界史へ——地球市民のための構想』（岩波書店、二〇

一一)

吉田裕「近現代史への招待」岩波講座日本歴史第一五卷 (二〇一六)
永井和「近世論からみたグローバル・ヒストリー」岩波講座日本歴史第
二二卷 (二〇一六)

紀平英作『ニュースクール——二〇世紀アメリカのしなやかな反骨者た
ち』(岩波書店、二〇一七)

(京都大学名誉教授)